

憧れの日本

マルティンス・ルジミラ

日本語・日本文化研修留学生 ブラジル

11歳のころ、私は妹と学校ごっこをするのが好きだった。そのころから、自分の将来のことをよく考えていて、教師になりたいと決めていた。でも、何を教えたいのかわからなかった。高校の物理学の先生か歴史の先生か、とけっこう迷っていたが、その迷いも国立の外国語の学校に通うところまでだった。この時には、英語の先生になれるなあと思うようになっていた。



気がつくと、6年後、2014年にブラジル連邦政府の奨学生としてアメリカのジョージ・ワシントン大学へ留学しに行くための準備をしていた。その経験があったからこそ自分自身の世界観が変わり、世界の国々の文化にもあこがれるようになった。外国語は、そのことばを学ぶ、また教えるということに価値があるだろう。それで、ずっと幼いころから探してきた私の夢は、死ぬまで世界の様々な言語や文化を学ぶというとても純粋なものだということがわかった。



2015年、日本語教師になるためにブラジリア大学の日本語学科に入学した。3年間の大学生活を通し、一般的な教授法などを学習したりボランティアとして友達や後輩に初級レベルの日本語を教えたりしながら、一生懸命日本語も勉強してきたので、日本政府の奨学生として和歌山大学で1年間留学するチャンスに恵まれた。和歌山を選んだのは、日本の様々な地域や大学で何が体験でき、また学びたいことを調べているうちに、言語知識だけでなく、私にとって未知の文化や社会を経験するのに良い地域だと思ったからだ。

和歌山に来てから、9歳のころ住んでいた滋賀県のことを思い出しながら、和歌山はもちろん、日本の様々なことを学んでいる。おいしいミカンのところに来てよかったなあ、と今は感じている。印象的なことは、和歌山の方々が優しく、地域の伝統や文化に対して情熱があることだ。その方々のおかげで、文化や歴史で豊かな所を訪問したり、1000年以上前に創造された神社を訪れたり、300年以上続くお祭りに参加したりすることができた。8ヶ月和歌山に住み、高野山や熊野古道を歩くことができた。歩きながら、祖先の思い出を守ろうとしている強い気持ちがわかってきた。そういった経験があったからこそ、あまり好きでなかった自分の国の文化を違う目で見ることができるようになった。

豊かな文化の国であるにもかかわらず、文化遺産を守る必要があるという考えを持っている日本人の日本に感心がある。緑を大事にし、また、この国にしかない文学、言語、衣

類、料理、技術などを心から大切にしている日本人と交流し、私はこういった日本にあこがれを抱く。9歳のころ無理やりに家族と日本に来なかったら、今の思いはないだろう。13年前、日本に触れてきて人間として成長し、自国と全く違う文化を体験できてよかったなあと今の私は思う。

期待していた以上に、和歌山で学んできたことが多い。学んだ中でも、おそらく最も大事なことは、自国の文化や歴史を守る重要性がわかったということかもしれない。日本語の教師になって、人々に豊かな日本を知ってもらおうと同時にブラジルの文化を守る必要性和異国を文化的、歴史的や学問的に結びつけたいと願っている。

